

ポジティブサポートの世界(4)

「その人らしい生き方」を目指して

村田 愛

ポジティブサポートの魅力とは、人を知る手がかりが個の存在にあると認識し出発することにあります。まず、個性として「その人」がどの様な人かを捉えるところから始まります。そして、その捉えた「現実」を積み重ねていくことで、将来が身近に感じられます。

ここで、その人とその現実を知る手がかりを一般社会通念としての手がかりと対比することでポジティブサ

ポートを整理し紹介します。

表1にみるように一般社会通念として人を知る手がかりは、個人の能力やある集団の中での協調性の有無に片寄りがちです。それは、既成の枠に当てはまるか否かが判断基準とされているからです。

ポジティブサポートは「その人らしさ」とか「生きがい」を追求し、それらがその人の生活に生かされるよう

▼表1 ポジティブサポートと一般社会通念としての手がかりの対比

一般社会通年としての 手がかり	ポジティブサポートの 手がかり
・能力	・その人の関心／夢／希望
・何ができるか／できないか	・何をしたいか／どんな人か？
・位置付け（ファイリング、あてはめ）	・個として個性を捉える
・一人で生きていけるか（自立）	・いかに他の人と共に一緒に生きていけるか
・規制（コントロール）がきくか、きかないか	・（自分の人生を）主体的／個性的に生きていく
・予想（予測）	・展望
・既成の社会に合わせる	・本人の望む方向が見えてくる
・将来の為の現在	・現在を積み重ねて将来ができていく

力を合わせていくことを目指します。「その人らしさ」とか「生きがい」を考えることは、凡庸な評価基準や既成の枠をなぞっていくだけでは不可能です。周囲が持っている価値基準だけをベースに評価をしていくと、その人そのものが見えなくなることがあるからです。

個の人／個性を大切に

個の人／個性を大切にすることや主体性を重視することが、人をわがまま／自分勝手にすると思う考え方もあります。しかし、私は違うと思います。個の人／個性を大切にすることこそが、「人の尊重」という最も大切な関わりの基盤です。そして、主体性を重視するということが、自分自身の人生を生きている感覚をもつカギになると思います。主体的に生きるということは、自身で考え、決定しなければなりません。それには、もちろん責任が伴い、生じる結果を引き受けなくてはなりません。

私は、知的障害のある青年を対象にした週二回のグ

グループに関わっています。そのグループは、仲間としてお互いに支えあい協力しあい、自分がどのように過ごしたいかを選び、自分らしく日常の生活を楽しむ場として開かれています。そこでは、年齢相応の活動や関わりを大切にし、その時その時仲間の提案にそった過ごし方をしています。例えばカラオケに行ったり、おしゃべりしてクリスマスのお買い物に出かけたりしています。

そこに来ているゆりさんは、グループの中で料理・配膳や人をおもてなしすることが大好きです。毎回のグループの献立を決め、買い物、調理、配膳を楽しみに行っています。そのことから、ゆりさんの将来の夢は何だろうと考えました。好きなことを生かして、具体的に「仕事」として新しくチャレンジしてみたら「今」より手ごたえがあり広がりのある「自分らしい」生活ができるのではないかと考えました。

「ゆりさんらしい生き方」を考える

ポジティブサポートのように、ゆりさんの関心のあることや可能性をベースに近い将来実現可能な変化を考えたのです。すでにゆりさんが好んで行っていることを考えてみると、飲食業がいいのでは？ と思いました。しかし例えばどこかの飲食店でウェイトレスとして働くというのは、唐突すぎるような気がしました。ゆりさんの場合、お給料をもらうことが仕事に求める一番大事な要素だとは考えなかつたからです。まして、不特定多数の知らない人達と接するサービスマン（飲食業でウェイトレス）に、彼女が喜びを感じるかどうかともわかりませんでした。

まずは、ゆりさんが大好きな人のところで週一度開かれていた小さな集まりでの調理、配膳、おもてなしのアルバイトをジョブコーチと共にしてみるという具体的なアイデアが生まれました。それをゆりさんに話し、お

仕事をしてみる気があるかきくと、即答で「する」と答えたのです。ゆりさんのお母さんにも尋ねてみました。

ゆりさんが「仕事」をするという発想も無かったし、もちろんお給料をもらえるなど考えたことが無かったとおっしゃっていました。初めての試みなのでゆりさんがか「仕事」という認識をどの程度しているか、そしてしっかり定時に継続して通えるかどうかは半信半疑だったようでした。しかし、そのアイディアは、初の「仕事場」としてゆりさんの緊張感をもっとも少なくできる環境と思ったようでお母さんも喜び、次の日からゆりさんのアルバイトは始まりました。

「仕事」を通してゆりさんが教えてくれること

◇ゆりさんの「現実」

ジョブコーチは、その時その時の仕事内容をゆりさんに伝え、最初の段階では彼女の仕事を一緒に行います。そして、彼女が必要なことを一緒に考え、徐々に教え、

サポートしながら、彼女が将来的に仕事を一人でできるようにするよう、計画的にサポートしていくことがジョブコーチの仕事です。そこで大切なことは、ゆりさんの意欲ともちろん頼まれた仕事を実際に行うことです。

彼女は右側の身体に麻痺があります。しかし、彼女は右側の手先の不自由さを右側の腕や口を工夫して使うことで補っています。彼女は自立心が強く、自分でできることは自分で行いたいと思っていることがまわりにいる人の想像を超えていることもあります。(幼い子どものように)守られる存在ではないと主張していたようにも思います。周りにいる人がゆりさんの片手が不自由だからと言う配慮でグラタン皿を持ってあげようとする時、ゆりさんは嫌がったりします。ゆりさんにしてみたら、周りの人に先走って



手を出された感じがしてしまふのでしよう。自分の仕事を自分でしたい／＼できることに、手を出された感じがあるのでしよう。ジョブコーチがゆりさんにグラタン皿が重たく熱いことを伝え、オーブンから出すことができるかきくと、右腕をうまく使い「自分でやる」と言う時もあります。もしくは二人で相談し、ジョブコーチがグラタン皿の右側を持ち、ゆりさんが左側を持ちオーブンから取り出すこともあります。そのようなことも、ゆりさんらしさです。

彼女のことに関しては、周りの人に決められるのではなく、ゆりさん自身で決めたいのでしよう。相談もされずに、手を出されたくはないのでしよう。自分で工夫してやりたいと思う気持ちの強さに感心してしまいます。

彼女が必要としていることのサポートが必要なので、それには彼女が必要だと感じることをゆりさんが周りの人にその時伝えることが重要になってきます。

◇「仕事」に対する意識

初めから「仕事」に対する緊張感と責任感をゆりさんは持っていました。自分のやり方や自分のペースを大切にしたいと、時間制限があるとと言われるのは好きではない。例えば、「仕事」には比較的柔軟にこなしていきます。例えば、本当はいつも食材の切り方を自分で決めたいと思っけていても、ジョブコーチが初めに献立によってちがう切り方を見せるとそれを実行してくれるのです。

昼食を作ることも仕事であれば、お昼の時間にはお客さま達が食事できるように配膳を終えなければ困ってしまいます。それを実際にゆりさんは受け止め、一生懸命やろうとしてくれるのです。それは、仕事意識といえると思います。もう一年ほど継続して働いてきて、ゆりさんは仕事内容も手順も把握しています。献立によっては長い時間が掛かることをジョブコーチがゆりさんに説明した後、時間に間に合うように仕事を先に行おうとすると、ゆりさんは自分がやると急いで調理場に来てくれ

るのです。

初めのころは、彼女の調理する献立は、彼女に決めさせてもらっていました。それは、彼女の「仕事」の意欲に大きく影響を及ぼしていました。今では、リクエストを聞いて献立を決めることも増えています。それは、きっと周りの人達を想い調理・配膳した時に喜んでもらえる、よりいつそうの満足感・充実感があるのではないのでしょうか。

一度だけ朝眠くて、仕事に行かないとゆりさんが決めた日がありました。その後ゆりさんには、仕事は嫌ならやめてもいいものだといいことを伝えました。無理に仕事を強いるのがこの「仕事」の目的ではないのです。しかし、仕事場では、彼女を期待して待っている人もいます。彼女の役割がある今、気が向かないという理由で休めば、雇い主は困り納得しないでしょう。どうしたいか（辞めるか続けるか）決めて欲しいと雇い主からゆりさんに伝えてもらいました。彼女は焦ったようでした。休

むことがそんなにも影響力があると思っていなかったのかもしれない。そんなにも期待を裏切ったことが彼女には響きつらかったのではないのでしょうか。「続きたい」。もう一度握手をして「契約」を続けようとゆりさんは雇い主を説得しました。

もちろん必要以上のプレッシャーをかけることを目的としてそれらを伝えたわけではありません。彼女には自分の決断に対して、結果を引き受けるだけの力（自信／プライド）があります。彼女が機会を得た時、彼女が仕事をすることを決め、「契約」という形で雇い主と約束しこのアルバイトが始まりました。それこそ彼女の自己決定であり、やめることを選んでいけないわけではないのです。ジョブコーチも雇い主であるゆりさんの大好きな人も、ゆりさんがそこを引き受ける為のサポートならするつもりでゆりさんに話したのです。そう考えてでも、彼女が自分の決定したことに対して責任をとる機会をチャンスと考えたのです。

自分の人生を生きている感覚は重要で、なによりも必要だと私は思います。つまり、豊かな選択肢と自己決定する機会こそが「生きがい感」に最も影響を及ぼすと言っても過言ではありません。人は、自己決定することや、その結果を引き受けることのサポートを、必要としているといえるのではないのでしょうか。

個性と可能性を発揮する時

ゆりさんは、「言葉」で自分の思いや気持ちを表現するわけではありません。しかし、ゆりさんなりにお客さま達に伝わりやすいように表現を工夫することが増え、お客さま達はゆりさんの表現を感じ取り「ありがとう」とか「うれしいわ」とか「ゆりさん楽しそうだね」と声をかけてくれます。お客さまを含む仕事場の人達はゆりさんそのものを見ています。ゆりさん自身を尊重しているのです。これらの仕事場での経験は、ゆりさんが受け身ではなく、発信者として周りの人達とコミュニケーション

ションをとり、自分の行為と存在に対して期待され感謝される大人として、社会に参加する一員であるゆりさんの自信とプライドを持てる経験だと思えます。

自己決定は、容易なことではありません。ゆりさんは自己決定を体験し、その結果を引き受けることで輝きを増しています。そうして「自分らしい生き方」をしているという実感が持てるようになってきたのでしょうか。

ゆりさんの仕事ぶりを見ていて、感動に近い感覚を何度も味わうことがあります。そのゆりさんの一生懸命さ、責任感、ひたむきさに圧倒されてしまうのです。あたり前のように、彼女の役割としてゆりさんは仕事をします。お客さまにも丁寧に接し接客します。そして、皆さんが帰り、ゆりさんの仕事が終わった時、一息ついて、時には大きいため息をつけてジョブコーチと大好きな雇い主と三人で一緒にお茶を飲み、「お疲れ様でした」と言われると嬉しそうです。そして、家に帰る途中でまた嬉しそうに身体をゆすったり、大きな声で

笑ったりします。社会人として生きはじめた今、仕事を終えてお家に帰ることに、よりいっそうの喜びを感じるようです。

確かに仕事の緊張感で疲れることもあるでしょう。でも、ゆりさんが、彼女の存在そのものに自信をもっていることは間違いないと思います。御両親が、お仕事帰りのゆりさんに「今日はどうだった？」と言うと、ゆりさんは誇らしげにお給料袋を見せ、大切に溜めているそうです。

「私は仕事しているの」というプライドを感じ、「その仕事を私は好きなのでしている」という充実感、何にも変えられない一人前の社会的感覚なのでしょう。

人は可能性に富んでいます。その人にとって魅力的な環境あるいは冒険をする機会を得ることで、現実が開かれ充実していくと私は信じます。そして、機会に巡り合うことで、周りの人の認識や期待以上に、その人の人格の奥深さがうかがえることがあるのです。

現実をふまえ、

理想を現実的に追求するということ

ポジティブサポートは、その人らしい生き方を追求し、実現していくことを目指します。好きなことを行いながら生活していくことと、それに伴う周りの人々のあたり前の評価／感謝は、生きる喜びにつながります。そして、人は成長していきます。ゆりさんにとっては、仕事という社会的な役割があること、それに対してお客さま達に感謝されることの喜びが彼女の意欲的に生きる支えになっていると思います。

ゆりさんの表現も豊かになり、複雑な心境や要求も表現するようになりました。例えば、自分のやり方が正しいのかどうか尋ねる



ような仕事をしたりします。自分は困っているということや具体的なことに関して助けが必要だとジョブコーチに伝えます。そして、時には仕事で、「これはこうするんだよね」という仕事で注目を得て、その後自分で拍手をして一緒に拍手してもらいたいかのように促します。ジョブコーチや雇い主が、拍手をすると嬉しそうにまた仕事を続けます。自分自身に自信を持つことで、ゆりさんは自分を切り盛りし、自分の気持ちをふるいたたせることもできるようになっているのだと嬉しくなります。

ゆりさんの変化を目の当たりにし、自分に合ったその人らしい生き方は人を輝かせるのだと確信します。障の種類や能力（できること／できないこと）で振り分けられるプログラムに通うことは、「彼女らしい生き方」と感じられなかったのではないかと思います。そのプログラムは、あまりに狭く、限られた将来の選択肢に適応させる為の準備に過ぎないことに彼女は気付き、なんと

も言えないつまらなさ、重苦しさ、一言でいえば希望の無さを感じていたとしても誰も驚かないでしょう。しかし、今、彼女の人間関係は拡がり、彼女の世界観が変わったのではないのでしょうか。自分のできることを生かした「自分らしい生き方」を、自分は選んで生きていると感じていると思うのです。

ポジティブサポートは、現在を積み重ねて将来ができていくという、「将来」の捉え方をします。たえず現在を見つめることが、次への可能性・方向性へとつながっていきます。将来、ゆりさんが望む時、より広い社会に出て、軽食を出す喫茶店で働くことも選択肢として考えていきたいと思っています。その時、その時、より「その人らしい生き方」を、と考えサポートしていくことをポジティブサポートといいます。

(ポジティブサポート研究室主宰)